

機関番号：22702

研究種目：基盤研究（C）（一般）

研究期間：2008～2010

課題番号：20592500

研究課題名（和文）臨地実習における効果的な技術教育のモデル開発と評価に関する研究

研究課題名（英文） The Development of an Effective Nursing Skill Teaching-Learning Model in Clinical Practice and Its Evaluation

研究代表者

小山 真理子（KOYAMA MARIKO）

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部看護学科・教授

研究者番号：50178399

研究成果の概要（和文）：

看護学生が臨地実習の場で看護技術の学習を効果的にできるための看護技術教育モデルを開発することを目的とした。初年度は病院の実習指導者 1086 名に、看護技術学習を促進する要因を抽出するための実態調査を行った。2 年目は実態調査をもとに学生が安心して看護技術を習得できるための教授・学習モデル(案)を作成した。3 年目はモデルの妥当性について、実習指導者 29 名より意見をj得て評価し、改善に向けて修正し、臨地実習で安全かつ効果的に看護技術の教授・学習を進めるためのモデルを作成した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop an effective nursing skill teaching-learning model in clinical practice for basic nursing education. In the first year, 1086 clinical instructors were surveyed as facilitators about their clinical nursing skills by a questionnaire. In the second year, a teaching-learning model to study nursing skills in clinical settings was tentatively developed. In the third year, the validity of the model was evaluated by clinical instructors based on the findings of 9 group interviews. Therefore, a nursing skill teaching-learning model was developed to facilitate the study of nursing skills in a safe and effective manner by nursing students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護技術、看護教育、臨地実習、教育モデル、実習指導者

1. 研究開始当初の背景

看護基礎教育の充実に向けて看護師教育の技術項目と卒業時の到達度（案）（平成 20 年 2 月 8 日医政看発第 0208001 号）が明示され、今まで以上に実習での技術教育方法における課題の解決策に向けた検討が必要となってきた。

看護技術の教育目標の達成に向けて臨床と教育の場の両者が相互に話し合い、より良い実習のあり方を求めていく必要がある、各教育機関と各々の実習施設とで話し合いを進めているが、実践の場での技術の経験については流動的な現場の状況に合わせざるを得ないために、遅々として改善できない現状にある。看護基礎教育における看護実践能力の育成が重要であるとは言われているものの、臨地実習で学生が経験できる看護技術は限られており、卒業後の新人看護師のリアリティショックの一因になっている今日、学生が臨場感ある実習の場でできるだけ看護技術を体験できるための実習の在り方について検討する必要がある。

臨地実習における看護技術教育の課題を明らかにし、その体制づくりのためのモデルを示すことにより、看護基礎教育の改善に貢献できると考える。

2. 研究の目的

看護師教育の技術項目と卒業時の到達度（案）として示された技術を、臨地実習の場で、学生が安心して実施できるための環境について探求し、看護技術の学習を効果的にできるための看護技術教育モデルを開発し、そのモデルの有効性について評価することを目的とした。

3. 研究の方法と成果結果

平成 20 年度は、臨地実習の場である病院

に所属する実習指導者を対象に、学生が看護技術を体験できるための環境要因および看護技術学習を促進する要因を抽出するための実態調査を行った。平成 21～22 年度は、平成 20 年度の実態調査をもとに学生が安心して看護技術を習得できるための教授・学習モデル(案)を作成し、その有効性について、実習指導者より意見をj得て評価し、モデル(案)を修正した。

【平成 20 年度】

1) 臨地実習で学生の技術教育を促進する要因に関する研究

(1) 研究方法

2 病院の実習指導者計 15 名を対象にフォーカス・グループインタビューをした結果を参考に質問紙の内容を作成した。質問紙の内容は、病院の病床数、患者数、平均在院日数、病棟の看護師数、受け入れている教育課程、受け入れている実習の種類、1 日あたりの学生の平均的な受け入れ人数、病棟における基本的な受け入れ態勢、実習指導者が不在の時の対応、実習形態、看護技術実施時の承諾書の有無、臨地実習で学生が患者に看護技術を行う機会を多くするための工夫について等である。

日本医療機能評価機構（以後、医療評価機構とする）により病院機能評価を受け、200 床以上の病院を本調査の対象とした。医療評価機構から認定（2008 年 9 月 29 日）を受けている 2527 施設のうち、精神科単科または療養病院は除外した 1033 施設から更に調査を行う病院数の規模を縮小させるために、都道府県別に認定病院を検索し、対象となる病院を順に条件にあう病院のリストを作成、その中から病院を層化抽出した総数 362 施設を対象病院とした。

調査期間は、2009 年 2 月 1 日～3 月末日。データ収集方法は、362 病院の看護部長に対

して、研究依頼し調査紙と返信用封筒を各 3 通送付し、看護部長から実習指導者に配布を依頼した。質問紙は、実習指導者による無記名自記式とし、個人の自由意志により質問紙に記入し、個別に同封した封筒により返信することとした。

分析は、数量的データは記述統計及び、各項目間の頻度の差の検定にはカイ二乗検定を行った。自由記述等の質的データは、意味のとれる短文にしたのち、類似する意味内容ごとにカテゴリー化を行った。

<倫理的配慮>

質問紙調査の依頼文に研究目的と方法を明記し、無記名であること、得られた結果については厳重に保管すること、結果の公表方法について明記し郵送した。研究参加への了承は、質問紙の返送を持って得られたと判断した。所属機関の研究倫理審査委員会(20 - 049)の承認後に実施した。

(2) 研究成果

■対象者が所属する病院の特徴および対象者の経験

回収数は 426 件 (回収率 39.7%、有効回答率 100%) であった。所属病院規模は、200 ~ 399 床が 229 (53.8%)、400 ~ 599 床が 107 (25.1%)、600 床以上 75 (17.6%) であり、中規模病院に所属する者が半数を占めた。病棟での直近の平均在院日数は 21.4 ± 20.2 日、看護師の総人数は 24.6 ± 5.5 人、平日の一日の看護師人数は 9.4 ± 2.6 人であった。また、対象者の看護師経験年数の平均は、 15.6 ± 7.0 年であり、臨地実習指導経験年数は、 6.2 ± 5.3 年であった。

対象者の所属病院で実習を受け入れている教育課程は、専門学校の実習を受け入れていることが多く、次いで大学であった。受け入れている実習は、基礎看護実習から在宅看護論実習まで 8 領域全ての回答があり、主に

受けている実習については、成人看護学実習 (急性期、外科系) が 24.6%、成人看護学実習 (慢性期、終末期、内科系) 26.5% と回答が多かった。

■実習指導体制と受け持ち患者の実習形態

病棟での学生受け入れ人数の平均は 4.5 ± 1.5 人、最大では 6.1 ± 2.2 人であり、対象者が所属する病院の入院案内に、「臨地実習への協力をお願い」の記載については、「記載されている」が 65%、「記載されていない」が 26%、無回答が 9% であった。

病棟の基本的な実習指導体制については、概ね 3 つのタイプに分かれ、「実習期間中、実習指導者はチームメンバーに入らず、実習指導者を専任で行う」が 32%、「実習指導者がチームメンバーに入りながら、実習指導を兼任で行う」が 25%、「実習指導者だけが学生の指導を行うのではなく、実習指導者以外の病棟スタッフも行う」が 34% であった。その他に「特定の実習指導者はおかず、全スタッフで実習指導を行う」が 3% であった。

実習指導者が不在時の対応方法については、「病棟スタッフ (師長・主任を含む) が実習指導者の役割を担う」が 32%、「病棟スタッフが指導する」が 32%、「実習指導者の代行をするスタッフがいる」の 18% であり、病棟スタッフが実習指導を行う割合は、合わせると 82% であった。一方、「実習指導者が複数であるため、不在であることはない」が 15% であり、それに対して「教員だけで指導する」はわずか 1% であった。

受け持ち患者に関する実習形態では、93% が「基本的には一人の患者を受け持つ (実習期間中の患者の変更を含む)」であり、6% が「一人の患者を受け持つ時と、複数の患者を受け持つ時がある」、「同時に複数の患者を受け持つ」あるいは「特定の患者を持たない」との回答はほとんどなかった。

■学生が患者に看護技術を行う機会を多くしたいと考えていても出来ない理由

自由記述を分析した結果、【患者による制限】

【実習指導環境による制限】【学校側の実習目標と方法による制限】【学生側による制限】

【看護技術内容上の制限】の5つのカテゴリーが挙げられた。【患者による制限】には、3つのサブカテゴリーが含まれ、特に〔技術提供に該当する患者の不在〕(50件)、〔患者の承諾を得ることの困難さ〕(49件)が多く挙げられた。【実習指導環境による制限】には、4つのサブカテゴリーが含まれ、〔看護業務の多忙さ〕(57件)、〔病棟(科)の特性〕(25件)、〔指導者とスタッフとの調整不足〕(18件)などが多く挙げられた。

【平成21～22年度】

2) 看護実践能力の育成をめざした臨地実習における看護技術教育モデル(案)の作成

(1) 研究方法

看護技術教育モデル(案)を作成し、その有効性について評価するために、①看護技術教育モデル(案)に必要な要素(以下、必要な要素と省略する)の検討、②文献による必要な要素についての確認、③グループインタビューによる必要な要素の確認、④モデル図(原案)の作成、⑤モデル図(原案)についてのグループインタビューによる実習指導者の意見の聴取、⑥モデル図(案)の修正を行った。①～③は、平成21年度、④～⑥は、平成22年度に実施した。

「臨地実習で学生の技術教育を促進する要因に関する研究」で得られた安全に学生が看護技術を実施するための実習指導者の工夫に関する自由記述の内容から①の必要な要素(案)を抽出、その内容の妥当性を文献により検討した上で、6要素(案)を生成した。その6要素(案)を実習指導者に対して、技術教育モデルの要素として必要な要素で

あるか、実習指導者が特に重視していることなどについて、グループインタビューを行い、その内容を分析して、さらに文献検討を加え、7要素から構成される看護技術教育のモデル図(原案)を作成した。次に、モデル図(原案)で示した構成要素について、必要な要素が含まれているか、臨地実習で活用するには、どのような言葉や説明を加えるとより効果的になるかなどについて、実習指導者へグループインタビューを行った。インタビュー内容を分析し、研究者間で検討したうえで、モデル図(案)を作成した。

<倫理的配慮>

自由意志による参加であり、不利益は被らないこと、プライバシーが保持されることなどを口頭ならびに文書で説明し、文書により同意を得た。データは個人が特定できないように処理した。所属機関の研究倫理審査委員会(21-049、22-042)の承認後に実施した。

(2) 研究成果

実態調査の一部と文献などの結果から抽出した6要素(案)【学生の特徴の見極め】【過度な緊張からの解放】【イメージ化の促進】【適切なフィードバック】【状況変化への対応】【共通の目標と評価】)は、文献の分析において、記載されている内容と整合性があり、妥当なものであることを確認した。また、2病院の実習指導者計15名を対象にグループインタビューをした結果でも、看護技術教育モデル(案)に必要な要素として妥当であり、実習指導者は、6要素(案)全てが必要な要素であると答えた。インタビューの後に、再度、文献を参考にして研究者間で討議し、以下の点を踏まえたモデル(原案)を作成した。

■学習プロセスを進めるための準備状況を整え、変化する状況に合わせた学習プロセスを促進させ、学生の看護実践能力が広がって

いくことを基本モデルとした。

■基本要素である「共通の目標と評価」は、学習プロセスの始まりに「看護技術教育の教授・学習目標の共有」、終わりに「看護技術教育の評価」を配置した。

■学習プロセスにおける必要な要素(案)に、「安全に実施するための段取り」と「やってはいけないことの確認」の2要素を追加し7要素とした。

■7要素は、<学習プロセスを進めるための準備状況を整える>として5要素(【学生の特徴を見極める】【安全に実施するための段取り】【やってはいけないことの確認】【実施時のイメージ化の促進】【過度な緊張からの解放】)、<変化する状況に合わせた学習プロセスを促進させる>として2要素(【状況変化に合わせた学習プロセスを促進させる】【適時なフィードバック】)に分けてまとめた。

■看護実践能力は、「ヒューマンケアの基本的能力」「特定の健康課題を持つ対象者へ看護を計画的に展開する能力」「ケア環境チーム体制の整備力」「実践の中で研鑽する能力」の統合としてモデル中に示した。

「看護技術教育モデル(原案)」の構成要素について、実習指導者(5施設29人)へグループインタビューした結果、実習指導者は全体的に肯定的な意見であり、これらの構成要素は必要なものであってモデル図として示されることが重要であるという認識であった。しかし、現在示されているモデル(原案)図だけでは、その意図するところが伝わらず、説明文が必要であるという意見が多かった。また、誤解の生じないような表現やより理解しやすい表現に修正することに加え、【患者への協力要請】【学生の学習状況の把握】等の基本的要素を加えてモデル(原案)を修正する必要性や、活用に向けての課題が

明らかになった。

そこでさらに研究者間で検討し、看護実践能力の育成をめざした「臨地実習での看護技術教育モデル図(原案)」を修正し、看護実践能力の育成をめざした「臨地実習での看護技術教育モデル図(案)」とし、以下の点を修正した。

■<学習プロセスを進めるための準備状況を整える>は9要素で構成され、【患者への協力依頼】【チームの一員としての受け入れ】【学生の学修準備状況の把握】【学生の思考・行動の傾向の把握】【やってはいけない事項の確認】【学生の主体性の尊重】【安全に実施するための段どり】【実施時のイメージ化の促進】【過度な緊張からの解放】とした。

■<変化する状況に合わせた学習プロセスを促進させる>は3要素で構成され、【状況変化の予測と対応】【看護師による手本の提示】【適時なフィードバック】とした。

■モデルの構造の工夫し、看護技術の指導者を教員も含め「看護師」とした。看護実践能力が、臨地実習での実習指導者・実習指導教員・スタッフの働きかけによって大きくなるイメージとなるように図に示した。

■モデル図(案)の説明文が必要であるという意見をもとに説明文例を作成した。

平成21年度から22年度にかけて実習指導者から「看護技術教育モデル(案)」についての意見を聴取し、文献も参考にしながら研究者間で検討を重ね完成度を高めてきた。今後は、このモデル(案)を実際に活用して学習環境を整え、臨地実習における効果的な看護技術教育のモデルとして完成度を高め普及していきたい。

4. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

[学会発表] (計 6 件)

- ① 加納佳代子, 水戸優子, 大石朋子, 小山真理子: 看護実践能力の育成につながる臨地実習の技術教育モデルの構成要素の検討, 第 30 回日本看護科学学会学術集会, 2010 年 12 月 3-4 日, 札幌.
- ② 大石朋子, 小山真理子, 加納佳代子, 水戸優子: 臨地実習で学生が安全に看護技術を実施するための実習指導者の工夫, 第 30 回日本看護科学学会学術集会, 2010 年 12 月 3-4 日, 札幌.
- ③ Mariko Koyama, Yuko Mito, Tomoko Oishi, Kayoko Kanou: Clinical instructor's perception of learning environment for nursing students, 3rd International Nurse Education Conference, 2010 年 4 月 11-14 日, Sydney, Australia.
- ④ Yuko Mito, Mariko Koyama, Kayoko Kanou, Tomoko Oishi: Factors impeding nursing students from practicing nursing skills in the clinical practice settings in Japan, 3rd International Nurse Education Conference, 2010 年 4 月 11-14 日, Sydney, Australia.
- ⑤ 加納佳代子, 小山真理子, 水戸優子, 大石朋子, 牧野美幸: 臨地実習における看護技術教育の指導環境の現状と課題その 1, 実習指導体制と患者への承諾書に焦点を当てて, 第 29 回日本看護科学学会学術集会, 2009 年 11 月 27-28 日, 千葉.
- ⑥ 水戸優子, 小山真理子, 加納佳代子, 大石朋子, 牧野美幸: 臨地実習における看護技術教育の指導環境の現状と課題その 2, 実習指導体制と教員の関わりについての分析, 第 29 回日本看護科学学会学術集会, 2009 年 11 月 27-28 日, 千葉.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等: 無

5. 研究組織

(1) 研究代表者

小山 真理子 (KOYAMA MARIKO)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部
看護学科・教授
研究者番号: 50178399

(2) 研究分担者 (H21, 22 年度)

加納 佳代子 (KANOU KAYOKO)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部
看護学科・准教授 (H20 年度研究協力者)
研究者番号: 60535350

(3) 分担研究者

水戸 優子 (MITO YUUKO)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部
看護学科・准教授
研究者番号: 70230776

(4) 分担研究者

大石 朋子 (OISHI TOMOKO)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部
看護学科・助教
研究者番号: 40413257

(5) 分担研究者 (H20 年度)

牧野 美幸 (MAKINO MIYUKI)
神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部
看護学科・助教
研究者番号: 80322345